



文榮堂發兌文房書目

考槃餘事

明澤水小長  
東漢源謙校

白紙摺明州綴  
暫入全四冊

題畫詩選

關前盧門著

全仕立全三冊

書畫皆宜

吳煥氏撰輯

白紙摺明州綴  
暫入全三冊

題畫詩刪

森川竹庵著

全仕立全三冊

前川源七郎

文榮堂

寒燈夜話

小栗外傳卷之三

東都

絳山歎醜陳人戲編

第五編

藤代川小栗良弼を以て  
築波山小風同明主を遺る

於 204

且説小栗判官代助重八君父の命あつて采邑常陸國の賊討つと  
道次急ひてわける日あつて常陸の國を任川に到るなり此川  
を渡り高き大川なるに折しも秋の波雨ふるはたり白波高く漲  
れ急流を渡らばへまやうく四方ふ人を遣て船を索すは當村の  
大勢なき一渡舟あり目今此方の客とばして漕舟なるは先  
往くそる処も遠なれよ一人の少年声次揚て船を渡らば  
舟の心程ハ者より二間むりも漕舟なるは少年身は舟の心

東學

西



これ唯くよめらばと待たせむしん。生きたあざむき力強く。成童も満  
 ざらふ川入るる漁獲。山入るる木樵柴藪。尋常の人の三人四人一  
 做業。たゞ一人してなごふたがしれ色もは。妙なる近比此邑。白狼狼多り。  
 人をとり食ふ。又此川。悪しき水虎住。人と弱し食ふ。また人患ひ。怪む。  
 去年より近國群盜蜂起。此邑も賊のる。小侵されつ。邑人あつて。お  
 堪へ。財宝運。他郷に移。賊難を避。入と弛。す。小治。これ。を  
 人。母。語。り。近。比。白。狼。と。水。虎。と。群。盜。と。三。つ。の。害。あり。て。此。邑。群。盜。  
 ち。其。此。邑。は。生。れ。此。土。の。稻。梁。を。食。て。人。と。な。り。の。い。う。で。此。類。と。他。の  
 人。と。さ。ん。カ。の。か。ま。り。此。の。害。を。除。ん。と。む。い。と。る。此。の。免。され。あ。ま。し  
 し。の。お。母。様。ひ。あ。も。ま。へ。の。の。多。と。免。ら。る。は。と。ふ。少。治。を。頼。り。先  
 山。入。る。白。狼。を。斬。殺。し。次。に。川。入。る。水。虎。を。撃。手。殺。せ。り。ま。よ。り。盜。賊。を

人。と。せ。し。と。賊。と。大。勢。群。と。を。容。易。治。平。ら。ん。と。能。は。す。今。日。を。も  
 せ。の。お。の。み。を。惱。し。ひ。ぬ。と。語。り。け。れ。小。栗。助。を。これ。を。ま。て。な。ら。ん。と。も  
 さ。る。縁。故。ゆ。て。の。り。つ。く。え。た。と。も。當。世。の。豪。傑。と。さ。る。感。と。あ。ら。ん。  
 船。精。と。對。し。その。少。治。を。と。ら。る。對。面。せ。ん。と。相。あ。ひ。な。り。汝。よ。計。ひ。は。な。し  
 さ。ら。多。く。の。心。苦。淺。を。と。ら。ん。と。の。り。を。ね。船。精。を。ひ。て。ま。し。ら。ん。  
 少。治。を。た。え。志。氣。も。く。富。貴。の。人。と。ら。ん。と。も。あ。の。う。ら。ま。り。ふ。け。り。ね。考。え。ん。  
 對。面。と。し。て。は。強。て。對。面。せ。ん。と。あ。は。ま。ら。ず。自。ら。彼。う。家。は。入。め。ん。と。ん  
 と。し。に。判。官。代。助。重。そ。の。ま。を。た。る。ん。と。その。家。の。處。を。守。り。て。ま。よ。り。あ。  
 し。ら。ん。あ。ら。ん。と。前。ま。て。進。行。助。を。せ。敵。迎。む。は。し。て。歩。む。と。  
 と。西。下。の。山。の。麓。を。出。る。その。山。の。背。腹。は。一。軒。の。白。屋。あり。船。精。指。は。し  
 ち。ら。の。の。白。屋。を。少。治。を。家。は。は。り。と。これ。より。な。ら。ん。と。往。き。ま。し。



婦  
神



神  
靈

神  
靈  
代  
川

山  
東  
卷  
之  
三





其の幣を以て呈下と曰ふ人々を頼る我主を助けしめてんやと云へる。  
助重も僕も云我劉先主と似るもの程と汝武侯の智勇を以て  
助けしむればとりの多し小治本母は顧りたり。其の眞加の命とゆる  
りの子僕様と君の英名を慕ひ仕へしむんとと思ひまがり母は  
へきものなまは本何とも詮じまへ。今日まで宿志を果せしむる不圖  
君こそかこつてせまひいふまへ入るのころ其暮れの時抱入を宣つと  
命は養つこと人なら幸ひの速は汝をば是より速くふ従ひとお  
らせんとと思ひとれと前もゆりて。母はまへに入らざればと畏れ  
今のおほと昔も従ひまへせむ。ゆりて時のふは家母まなり。大馬乃  
勞と助けとまへせんと。恭敬のべりたり。是れ老女傍よりとみまへ  
發機のじと時と失ふべし汝平日慕ひしもの小治郎君の。さら

る抱もつんと宣つと入るまで辞さむ。あて人の親なるもの。我子のうへ  
さるの福あることなれば。雲井の昇るころとせられ。ひて汝の氏  
より入の上なる武士の發達は福をいふて。想ひまへも母の羈  
私うされて優曇華なる身の運の開く機会を過すべしと思ひり  
流るる。庄平まへとみお斯女人も免り何れも細のあふまへ。その  
さるもあはれども我主君の幣物と金銀の太刀一は若くは金一色と  
そへ小治を前母と。金は小治を親の扱ふ人小治と判るが  
爲きあはれはあはれ。感塔の涙は深く思ひ。終り母も賜物  
ふのれは老女の感涙せきあへど。たゞまへ合へ。拜三涙と故てまへりなむ。  
賤き土民をば抱もつもの眞加はな。爲きあはれ。賜うのれをば。正に  
今君のまへよりかく武士となり。まへとれ。の性をも。老女が



家へ代へ土民めて其性何とらとてあつた。ゆつた此上の恩めつたのふか  
 氏を終ひるんやとゆふも助重実道理なる。武士にして氏かたもゆふ  
 なり幸ひこれる池庄平の我家かあつて累世一の老儘なり。ゆつたも  
 ねまこあつた今日より彼が猶子となり。其氏を侵へ又庄平の二家らぶ  
 諱の一字とてらつて池の庄司助長と名づるべし。ゆつたあつたのけぬ  
 庄平とてゆふゆふも助重が残りつた命に伏し。このあつた  
 命とて感佩して喜びつた。ゆつた耐老女の厨のかつた退出が忽ち継子  
 土番お出君臣とてゆふゆふのふかゆふゆふと賜ふとてと。賤家のゆふゆふ  
 なるゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ  
 男兒も賜りゆふゆふと助重が前も居金けが小栗こよなく喜びゆふゆふ  
 とうふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ。尚

その序をもて庄平庄司と親子の義と結ぶ因の盃をゆふゆふ主従親子  
 四人が喜びゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ  
 盜賊も君の領を侵へ盜賊もこれる一般の賊なり。某此邑人の為ゆ  
 この賊を逐退んとする志まゆつたゆふゆふ一人の力か及びゆふゆふゆふ  
 事を果すとて君賊を退治ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ  
 助重の此国ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ  
 庄司城を討の術ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ  
 教よとあるゆふゆふ庄司勝をゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ  
 なるゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ  
 さいゆふゆふ土平をゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ  
 の慶系の一靈再生とて過世の因縁ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

こゝに結ひたる。こゝに當國筑波山に兄弟の強盜あり。兄は風間左郎  
正貞といひ、弟は風間八郎正國といふ。年僅廿七と十六かんと。習勇  
ありて、わりのをねむるといひ、盗賊の大將軍となり。下まぐりのて常陸  
の國の盜賊入り。こゝにこれより知れ従ひたり。然るに筑波山の東より藤井  
橋川とあり。此流とのまのなかりあり。其川を隔てる。常陸  
一軒の旅亭あり。これに風間兄弟の手下の賊めて鹿をといふ者。此所  
旅亭をめぐり、旅人をせし財宝多く持てる。旅客あれば、密に小舟と  
走し、筑波山に告知し、風間を呼びて、財宝を奪取せんとせん。されどその  
車常のせむ。只福者の宿りし。これのふれ、せ家盗人なふと知る。若し  
庄司、山侍とて、一討より賊を討んと想ふ。あかひに用ひ、賊の密謀を  
押す。麻六が密るのを知り、至君小栗あせり。馬よれば鞍おれおひとしく

牽せむ。多くは長櫃に押寄る。ははしく、武具金銀と入る。舟中をせむ。  
今回鎌倉殿の命により、小栗判官代助重采邑多氣の城に、は  
よして披露。士卒とて、埋伏はし。侍下僕僅に三十人。この引候。  
彼麻六が家宿りけり。麻六が小栗が先景を窺ふ。限りの筑波山  
に、いふ。風間兄弟の知れ。一人の小賊、手筒を持。筑波山  
の山寨に赴じり。小賊の麻六が命を奪ふ。小舟あり。橋川を西よして  
漕行。処に豫て小栗の謀あり。此川の芦の繁く、小艇を居る。他の庄平  
この舟に、忽ち頭れ出。彼小賊が、あつる舟に飛入り。のども云。賊を  
投へく。締殺す。其衣服を剥とり。これを奪入。腰に書簡を奪ひ。其  
舟を、程に筑波山の山寨に到り。麻六が、まを風を、兄弟を呈へ。是を  
兄弟被き、園てかき。喜び、庄平と麻六、下僕とあり。尚、先景を



小孫太  
孟賣  
勇と做  
終と者  
警と



小孫太  
池庄司

池庄平

小栗助重

百  
卷  
二  
三

さつりぬ斬やどか一盞茶付廿四五人枕をうつる人死せり。風間八郎此  
 光景をみるより。この旅客を欺きてつりと悟たれば此程斬入る事も詮  
 なく早く山塞小舟還り。兄正貞と謀を定め此恨を報ふべしと忽ち舟次  
 駛りし所を去退り。橋川の岩辺に至り。取寄る舟ありし舟中八人せ  
 ざるふ其舟四五艘ありしが一艘たかきんぞ。こらいつせんと想ふところ  
 後舟より山栗が多勢追寄るふ今は何とも治まを志すは呆然たる  
 折らば若間を去れば一艘の小舟あり。是さいつめと其舟小舟の舟中自  
 棹さして中流まで漕出たれば。おひもかき舟板の下より。一人の漢子  
 躍り出八郎が法勝をかひまがれば。さしめ八郎。不意を撃てかたしと  
 射る。又三四人の漢子舟低より射さ出押して繩をそをりけり。今舟低  
 よりの物ころは是流ととりあふ。則ち池庄平の甲夜は小滅は鷹で筑波山の

山塞小舟の風間八郎を欺き八郎をこへおひきはし舟よりぬぐりて舟を  
 窺ひその舟をば残りなく若間舟張り。おのれが舟を岩近くお繋ぎだちき  
 士卒四五人と共舟低舟張れ八郎が舟を待て急ぎ起て生捕りし。斯て  
 庄平の八郎を牽て判官代助重が舟出捕。舟中をこをりては。助重  
 庄平の切を賞し。さて八郎が舟を自ら解きゆるとをさくりたる。汝が骨相  
 を着るふ天晴當世の豪傑あり。惜る其器量ありてなとや。祭上の君子  
 とあるし。そ九人生れあが。盗をあるとりのは。渾足長家の子せなる。汝の  
 の救湯より寄る方なく。録林の群れ入るぞ。し。汝もさぞありつら。め早く  
 先非と悔素の良民あるこそ。賢し。再ありとらん。め我儀倉を。又  
 やへわげ。然るべき衣食の地をよへん。と。懸懸と説示たれば。八郎も  
 助重が忠告なれば。汝を感じ。君のし。示教も。と。心根は徹し。いと。香く。そ

存じぬ速き回意なり。再び山へ還りてとありひ付れど兄よな法郎  
 もも君の仁徳を志す。示教のほどは説諭し其志氣を改めして  
 陣中召俱一委ねらん。是は願くは時討の眼をまらり。山へ還らじ  
 ろ。此上のは恩ありとありを助重完示し。汝あひなまてよく  
 討らひんとその望まはし。故ちて山へ還りけり。庄平庄司の是を  
 謀るは彼輩の恩を我を知るもの。いそいで君の教は伏しやさん。必  
 ずしと申すは。助重もとも協の謀をかえ付。賊亦が仇を報はん。其  
 りと盜賊彼ホの。其の尚多。悉く誅せん。我々の兵も。其  
 後ねべ。徳を伏せんと。四方の賊自ら帰化せん。八郎の伏せも。兄  
 の法郎憤り懐て再び。この山へ。まき。這回も願くは生捕り。と。

1  
 39  
 20  
 21  
 22  
 23  
 24  
 25  
 26  
 27  
 28  
 29  
 30  
 31  
 32  
 33  
 34  
 35  
 36  
 37  
 38  
 39  
 40  
 41  
 42  
 43  
 44  
 45  
 46  
 47  
 48  
 49  
 50  
 51  
 52  
 53  
 54  
 55  
 56  
 57  
 58  
 59  
 60  
 61  
 62  
 63  
 64  
 65  
 66  
 67  
 68  
 69  
 70  
 71  
 72  
 73  
 74  
 75  
 76  
 77  
 78  
 79  
 80  
 81  
 82  
 83  
 84  
 85  
 86  
 87  
 88  
 89  
 90  
 91  
 92  
 93  
 94  
 95  
 96  
 97  
 98  
 99  
 100



